研究者の育成と高度職業人の養成

吉田 薫
基礎医学系教授

変革の波

ついさきごろ，国立大学の法人化に向けて各教育組織で中期目標・中期計画の素案が作成された。修士課程医科学研究科の素案作成の作業に加わり，法人化が身近に迫ったことを改めて実感している。教育や研究のありかたを見直し，明確な目標と具体的な計画をたてることが求められているわけであるが，良い答案を書くのは案外に難しい。発展を期して目標をたて改革に努めることは当然であり，医科学研究科でも，発足以来先輩達によってなみなみならぬ努力が積み重ねられてきた。改善すべき点を挙げることは容易であるが，それらは概ね，設備・経費・人員等の不足によるもので，努力にもかかわらず残されてきた問題である。計画はその達成度により評価されるであろうから，見込みの判然しない要求ばかり掲げるわけにはいかない。また，現行のカリキュラムや教育体制は，これまでの努力の集約に他ならず，これからの教育の核をなすものとして，受け継いでいくこともまた当然であるが，改革を掲げることに比べて威勢が良くない。このような印象を述べること自体，退嬰的にみえるかもしれない。

法人化に対応すべく，筑波大学の教育と研究の基本体制も大きく変わろうとしている。大学院，特に博士課程に重きを置く構想が形を整えつつあり，これを中心として修士課程の再編が進められるようにみえる。筑波大学の大学院の特色は修士課程と博士課程と並立させ，それぞれを独立した教育組織としたことにあった。再編構想のなかで修士課程全体としての独立性を維持すべきか否かについては多くの議論があったと聞くが，結論としては，維持しないということのようである。修士課程の研究科を括る枠組みをひとまず離れ，各研究科の状況に則して改組を考えるということであろう。医科

学研究科の場合，博士課程人間総合科学研究科をコアとする枠組みに再編されることになると思われるが，現段階ではいつどのような形で改組されるかは明らかでない。

二つの目的

独立修士でなくなることは，医科学研究科の将来にどのような意味を持つのだろうか。医科学研究科の運営に関るようになるまで，実のところ私には独立修士課程の意味がよく解らなかった。ひとつには，もともと博士課程との繋がりが強かったことがある。医科学研究科は，発足当初より，基礎医学研究者の育成と，医学関連分野における高度職業人の養成の二つを目的に掲げている。平たく云えば，進学する者と就職する者の両方を育てるということで，独立修士としては研究者が余分に付け加えられている。このことは，今後も重要な意味を持つことなので，その経緯について触れておきたい。

筑波大学の医科学研究科は，大阪大学の医科学専攻とともに，わが国で初めての医学の修士課程として1979年に開設された。これに先立つ大学設置審議会答申では，医学の修士課程は博士課程の前期段階として位置づけられ，研究者の養成を目的とするとされていた。4年制の学部出身者に医学博士課程への道を開くことを主眼としていたわけで，高度職業人の養成を標榜する本学の独立修士構想とは異なるものであった。このため，筑波大学と設置審の間で激論が戦わされたようであるが，結局，双方の理念を満たすために，医科学研究科は二つの目的を掲げて発足した。順番からいえば，研究者養成が先になり，本学が譲歩した形となっている。

多様性と独自性

このようにして，医科学研究科は二つの使命を担うことになったわけであるが，今振り返るとこのことはむしろ当然と映る。医学の急速な進歩とともに研究領域は拡大し，一方，少子高齢化をはじめとする社会状況の変化にともない医科学関連の職種も多様化している。幅広い人材育成の必要性は以前に増して明らかで，医科学研究科はいわば時代を先取りする形でこれに応えてきた。法人化にともなう組織の改編により，博士課程との関係はより緊密になるとしても，現在の教育目的をただちに変える必然性はないように思われる。

医科学研究科の目的が，研究者育成と高度職業人養成の二つを柱とすること

は，当然のことながら学生にとって重要な意味をもつ。高度職業人という奇妙な言葉の意味や，研究者と対比して使われる理由を正確に知る学生は少ないかしれないが，進学と就職の両方の道が開かれていることは誰もが承知している。これまでの実績，修了者の進路が如実にこれを示しているからである。進学か就職かは，学生にとって人生の大問題であることはいうまでもないが，入学の時点でいずれかに目標を定めているとは限らない。就職するつもりで入学し研究にのめり込んで進学に転ずる者も多いし，その逆もまた多い。実情に即して門戸を広げておくことは，学生からみれば良いことに違いない。

しかし，現在の教育方針が，自由度が高いという気楽なものではないことも学生はよく知っている。基本方針には，「医科学の全般について広い視野と基本的学識を修得させ，かつ特定の分野の基本的研究能力と実践力・応用力を修得させる」とある。乱暴な言い方をすれば，前者は講義・セミナー等に，後者は修士論文研究に該当する。注意すべきは，二つが「かつ」で結ばれていて，それぞれの要求水準の高いことである。両方の要件をみたすことは学生にとっては大変で，時間的余裕が殆どない。開設当初は必要単位数が今より多く，私は授業の多いことに呆れ，学生には授業の履修単位は必要最小限になどと助言していた。大学院は研究する所であり，就職を目指す学生にとっても知識よりは研究経験が重要と考えていたからである。しかし，厳しい方針は修了生からは概ね好評である。平成11年編纂の20周年記念誌には，様々な分野で活躍する修了生が寄稿しているが，それを読むとこのことがよくわかる。

非常に多くの教員を動員した，広範かつ充実した授業と熱心な研究指導は，医科学研究科の大きな特色であり強みでもある。他大学にも医学の修士課程が相次いで開設されている今日，医科学研究科にとって，多くの学生を引きつけるための改革と努力は最も重要な課題である。「特化」の難問にも直面せざるをえなくなるが，困難を克服する原動力となるのは，長年にわたり貯えられた自前の体力であろう。

（よしだかおる　神経生理学）